図画工作・美術への苦手意識をつくらない教育内容
―小学校教員養成課程における教育コンテンツ―

降　簗　　孝
山形大学

山形大学紀要（教育科学）第16巻第４号別刷
平成29年（2017）２月

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

山 形 大 学 紀 要（教育科学）第16巻 第４号 平成29年２月
Bull. of Yamagata Univ., Educ. Sci., Vol. 16 No. 4, February 2017

図画工作・美術への苦手意識をつくらない教育内容
―小学校教員養成課程における教育コンテンツ―

降 籏 孝
（山形大学）

（平成28年11月15日受理）

要 旨

本研究の目的は、図画工作・美術への苦手意識をつくらない教育内容を探求し、その教育コンテンツを開発することにある。平成26年度から実態調査の実施とその結果の分析から苦手意識を生み出す原因を追及し、苦手意識を解消させる要素を明らかにしてきた。その要素をもとに苦手意識を減少させる試みを教育内容として、実際の大学講義に取り入れ検証してきた。講義前と講義後に調査し、大学生の苦手意識の変容とその理由とを考察することで、小学校教員養成課程における図画工作・美術への苦手意識をつくらない効果的な教育コンテンツのいくつかを明らかにした。

キーワード：図画工作教育、苦手意識、教育コンテンツ、小学校教員養成課程

Ⅰ．はじめに　主題設定の理由と研究の目的

教員養成段階においては、美術科教員を目指す美術科の学生と異なり小学校教員を目指す学生の中には、大学入学前の段階から既に図画工作・美術に対する苦手意識を大なり小なり抱いている。そして、その人数の割合は少なくない。さらに、この苦手意識は、これから小学校教師を目指す学生の大きな悩みや不安要素にもなっていた。

その理由は、図工の専科教員がいる一部の小学校を除いて、普通一般の公立小学校では、学級担任の教師が担当する児童に対して国語・算数と同様に図画工作をも教えることが一般的だからである。つまり、小学校教師は苦手意識の有無に関わらず他教科と共に図画工作をも教える義務がある。そして現実的な問題として、実際の学校教育現場のベテラン教師自身の中には、日々教えているにも関わらず、図画工作・美術に対する苦手意識があることがわかっている。[1]

教員養成段階においては、学生の苦手意識を少しでも解消させ、苦手意識をつくらない教育を実現できる教師になってもらう必要性がある。重要な課題であろう。

本来、学習指導要領に示されたような教育を受けていれば、狭い尺度や価値観から生まれる苦手意識という否定的な感情は生まれ得ないものと考えている。

「この苦手意識の問題は、単に不得意感や表現能力の有無という個人的な問題という

よりも教育の在り方そのものの実態を示すバロメータとなっている。

造形美術教育をより良くするためには、対処療法的に苦手意識の問題に取り組み対応していくというよりも根本的に苦手意識そのものが生まれ得ない目指すべき図画工作・美術教育の実現こそが強く求められる。」[2]

今までの研究成果として、苦手意識の問題は、単に表現技術の有・無とか得意・不得意、器用・不器用といった個人レベルの問題ではなく、受けてきた教育の在り方から派生し、生み出され積み重ねられたマイナス的な教育経験を示したものである。

本研究の目的は、苦手意識が生まれない教育でもある目指すべき造形美術教育の実現のためにも苦手意識をつくらない教育内容を検証し、小学校教員養成課程における具体的な教育コンテンツを明らかにすることである。

Ⅱ．図画工作・美術に関する実態調査とその結果

附属学校との共同研究の過程で、図工・美術に対する苦手意識のある子どもの存在が話題に上がった。そこで、図画工作科・美術科の実態を把握するために、小学生から大学生までを対象にした本格的な実態調査を行った。[3]

最終的には、小学生から大学生まで合計1,608名の児童･生徒を対象に、図画工作と美術に関する実態調査を行うことができた。調査の詳細は別論に委ねるが、調査結果から現在の図画工作と美術に関する現状を児童・生徒の視点から把握することができた。

この実態調査の結果から明らかになった現実ともいえる現状は、小学生から大学生まで図画工作・美術に対しての意欲については、小学生の８割を最高に、中学でも６割以上ということで、概ね意欲的に取り組んでいることがわかった。また、教科に対する印象も嫌いというよりも好きであるという好意的な結果が出た。

しかしながら、苦手意識については、小学生段階では２割未満で苦手意識は少ないが、中学生になるとそれが５割近くに増加するということが調査の結果から判明した。それが、大学生になるとさらに増加して６割近くになることがわかった。

「調査結果から特に問題視するのは、児童･生徒が図工･美術に対して意欲があるにも関わらず多く存在していた〔苦手意識〕の問題である。意欲が低かった児童・生徒には確実に苦手意識の存在があった。造形美術教育をより良くするためには、この苦手意識の問題を少しでも解消させる必要がある。」[4]

このことから、児童・生徒に図画工作や美術科に対して意欲的に学習に取り組んでももらう為にも、苦手意識をなくす努力をしなければならない重要な課題と言える。

調査結果から特に問題視したのは、小学校の教員免許を取得し小学校教員を目指そうとしている大学生の苦手意識の割合が、予想以上にかなり高かったことである。

そこで小学校教員養成課程における必修講義、前期「教育実践（図画工作）」と後期「図画工作の基礎」の２つの講義の中で、少しでも苦手意識を解消するための工夫を教育内容に取り入れて、実証研究を行った。

平成26年度において講義前の４月当初と１年後の最終講義時に実態アンケートを行って、大学生の苦手意識の変容を調査することにした。大学生が抱いていた図画工作への苦手意識は解消したのか、あるいは少しでも減少させることができたのか、あるいはできな

かったのか、教育内容の試みの成果を考察した。

その結果については、苦手意識が「全くない」という割合は２％から７％に増加し、「あまりない」という割合も23％から34％に増加した。「ふつう」も15％から20％になった。苦手意識が「少しある」という割合は31％で４月当初から変わりがなかったが、これは同じ学生というわけではなく、「苦手意識がかなりある」という割合が29％から４％に激減したところから、苦手意識が全体として、「かなりある」から「少しある」という軽減する方向に移行した結果であることがわかる。

大学生の約20年間において少しずつ植えつけられてきた図画工作や美術への苦手意識も教育によって、完全には払拭できなくとも大幅に減少することを証明できた。

最後の調査では、苦手意識を変容することのできた理由についても聞いている。その理由の分析と考察から、苦手意識を減少させるための要素を明らかにしようと試みた。

Ⅲ．図画工作・美術への苦手意識を減少させるための要素

平成26年度と平成27年度の研究の成果として、苦手意識を減少させることの原因と理由の考察から、次のような５つの要素を明らかにすることができた。[5]

要素① ― 上手下手の呪縛から解放させること

苦手意識があった学生が、講義終了後に苦手意識を減少させることができた理由で多かったのが、「上手下手で評価されることがなかったから」であった。ここから、苦手意識のあった学生には、どうしても「うまく上手に作品をつくること」に精神的に強く縛れている現状があったことがわかる。この上手・下手という視点で作品を見たり評価したりする呪縛から解放させることが、重要な要素の一つと考えた。

要素② ― うまさよりも自分らしさ自分だけの表現を目指させること。

要素①とも関連して、うまく上手に作品を描きつくることを目指すよりも、自分らしい自分だけの表現を目指すことが大切であると理解させることである。

「教科の目標は、作品をうまく上手につくることよりも一人一人の思いやイメージをもとに、自分らしい表現を目指すことであり、それを重視することが求められる。」[6]

この自分らしさを目指させることは、表現の根源的な理念であり重要な要素である。

要素③ ― 自分らしさの表現を可能にする用具の知識・技能

自分らしさを表現するということは、表現することそのものに直接向き合う重要な事項である。しかし、それは容易くない。例えば、苦手意識の強い絵画表現においては、水彩絵の具の特性や基本的なパレットの扱い方などを理解していなければ、とても自分らしい自分だけの表現を目指して、試行錯誤したり工夫したりすることは難しい。

故に、児童・生徒の自分らしさの表現を可能にする用具の知識や技能は、要素②を満たすためにも避けられない重要な要素の一つであるといえる。

要素④ ― 表現本来の楽しさを味わわせること

至極当たり前の事項ではあるが、表現行為そのものが本来が持っている楽しさや面白さを味わわせることは、重要な要素の一つであると考える。それは、苦手意識が減少させることができた理由の中で、「表現のおもしろさがわかったから」「表現することが楽しかったから」が少なくなかったからである。さらに苦手意識を抱いている者は、基本的に表現

の楽しさや面白さを味わえていないことがわかった。そのためにも表現の楽しさを味わわせることは、重要な要素と考える。

要素⑤ ― 自分らしい表現が認められる学習空間があること

個々の子ども達が、自分らしい表現を目指したとしてもそれを認め合える学習空間がなければ、苦手意識をなくすことはできない。お互いに、上手さや巧みさではなく、その子らしさが認められるような学習空間が求められる。これは、重要な要素である。

現に、苦手意識を減らすことのできた理由の中に、「うまいではなく〇〇らしいね」と友人から褒められたことが、苦手意識が減った大きな理由に上げている学生もいたからである。また、鑑賞活動を通じてその人らしい表現の魅力を感じた学生も多かった。

これら５つの要素が総合的に生かされることが図画工作教育や美術教育においては、とても重要であり、具体的な教育コンテンツの開発には不可欠な要素であると考えた。

当然のことながら、小学校教員養成課程の講義においても、児童を意識しながら子ども達に苦手意識を植え付けないような教育を考えていく上でも、この５つ要素を踏まえた具体的な教育コンテンツが求められる。

Ⅵ. ５つの要素をふまえた内容を取り入れた検証授業の実践

苦手意識を減少させるための５つの要素をふまえて、大学の講義を通じて試行錯誤しながら、平成26年度から平成28年度にかけて、３年間実証研究してきた。

その結果、苦手意識を完全に払拭することは難しいことがわかったが、教育によって大幅に減少させることがわかった。その教育内容を精査し、精選することで効果的な教育コンテンツを明らかにしたいと考えた。

そこで５つの要素を踏まえて、平成28年度前期の小学校教員養成課程の必修講義、教育実践〔図画工作〕２クラスで実証研究を行った。教育実習前の２学年78名が対象である。

彼らの受講前に抱いていた図画工作のイメージは、「楽しい教科」が18名、「好きな教科」が６名、他にも「わくわくする教科」や「正解のない教科」と好意的な印象を応える学生がいた。それとは別に、「工作は好きだけど絵は嫌いだ」という内容で限定する学生も10名いた。この傾向は、毎年どの学年においても必ず存在している。

次に、図画工作・美術が「嫌いな教科」であるという学生が12名、「楽しくない教科」が５名、「いいイメージがない」が３名など、否定的なイメージをもつ学生も少なからずいることがわかった。中には「休息・息抜きの教科」が２名、「他の教科より重要でない教科」３名、「あそびの教科」２名、「楽な教科」など、他の教科に比べて明らかに軽視した教科意識を持つ学生もいて、これも別の面で気になる現状の問題といえる。

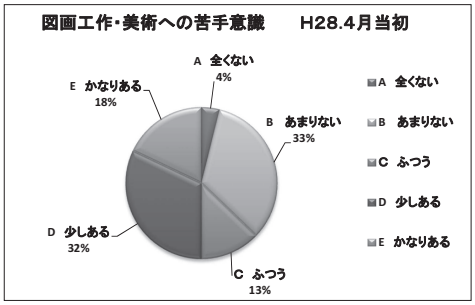

図１：苦手意識の実態４月当初

本テーマと関連して注目したのが、「上手下手で評価される教科」が15名、「苦手意識がある教科」12名、「得意･不得意でわかれる教科」という者も４名いた。ここに、大学生が抱いている教科観・図画工作のイメージが反映されている。

それを証明するかのように、苦手意識については、図１のグラフのように「全く苦手意識がない」学生が４％、「あまりない」学生が33％で、これは全体の37％にあたり、苦手意識の傾向が少ない状況であった。反対に、「苦手意識が少しある」学生は20名で32％、「かなりある」学生は34名で18％、これは全体の50％の大学生に大なり小なりなんらかの苦手意識があった。

この状態の学生達が、前期15回の講義を経て、苦手意識がどのように変容したのか、その結果のグラフが図２である。

「苦手意識」がかなり減ったという学生は16％、「少し減った」学生が72％であった。全体の88％の学生の苦手意識を減少させることができた。

次に、「変わらない」という学生は８％、少し増えた学生が４％、かなり増えた学生はいなかった。「変わらない」と応えた学生の中には、もともと苦手意識はなかったが、「もっと好きになった。」と記述している。

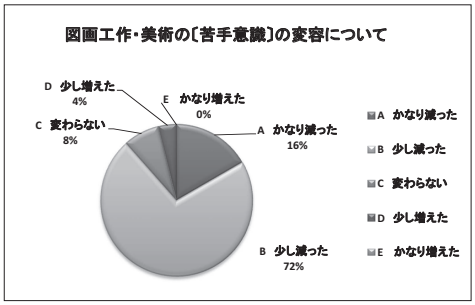

図２：苦手意識の変容

ここで注目するのは、苦手意識が減るどころか「少し増えた」という３名の学生である。調べてみると、３人とも苦手意識がもとからあった学生ではなく、最初は逆に「苦手意識が全くない」と応えた学生１名と「あまりない」とこたえた者２名であった。おそらく、苦手をつくらない要素の一つであるうまく上手な作品づくりでなく自分らしさの表現を求めたために、その難しさに直面した結果ではないかと解釈している。今後も原因追究と解消に向けて取り組んでいく。

講義後の調査によって得られた苦手意識を変容させることのできた理由の分析から、苦手意識をつくらない教育コンテンツが徐々に明らかになってきた。そこから、教育現場における実際の教育コンテンツとして具現化することができると考えた。

Ⅴ．苦手意識を減少させることができた理由の考察

苦手意識を減らすことのできる教育内容を明らかにするために、講義後の調査においては、単に苦手意識の変容を聞くだけに留まらずに、Ｑ４では、その変容に影響があったと思われる原因について、重要と思う順に記述してもらった。

昨年度の平成27年度は、その理由を自由記述で書いてもらったが、平成28年度は影響を受けた重要度も加味して、第１位から第５位まで記述できる調査用紙を活用した。

平成28年度の重要度第１位で影響があった理由は、「自分らしい表現を目指すことが大切とわかったから」が、全体の48.7％の38名いて１番多かった。昨年度も19名がかなり減った理由として書いており１番多かった。また、この理由は、重要度第２位でも11名（14.1％）が理由に挙げており、総合的にも重要な教育内容であることがわかる。

重要度第２位で多かったのが、「うまく上手で評価されるのではないことがわかったから」で、２クラス78名で23名（29.5％）の学生が理由に挙げている。昨年度でも14名いて２番目に多かった。自分らしい表現を目指させることと併行して、うまく上手で評価しな

いことを強調する必要性を確認することができた。

「要素①と併行して『うまく上手に作り描かねばならない』という概念から、『うまくよりも自分らしい表現の方を重視する』という要素②である価値観・教育観に本質的に移行させる必要があることもあらためて確認することができた。」[7]

次に、苦手意識が減少した理由で多かったのが、「グループ同士や鑑賞会で、他の人に認められたり、褒められたこと」で自信がついて楽しくなったという学生が10名いた。

ここから、重要な要素①と要素②とも合わせて、グループ内やクラスの学習の雰囲気をも含めた学習空間の質の在り方、つまり重要な要素⑤の必要性と有効性を確認することができた。河村浩章も次のように人的環境を含めた学習環境の重要性を述べている。

「指導の第１に考えなければならないことは、児童が造形活動をするのに適した環境を作ることにある。」[8]

以上のような苦手意識を減少させるための重要な要素が十分発揮されてきた所から、次のような「自分の作品の良さを感じることができるようになったから」とか「図工の楽しさや面白さがわかったから」という、図工の楽しさや面白さを実感することができたという要素④が発揮された記述が生まれることができたともいえる。

Ⅵ. 苦手意識をつくらない具体的な教育コンテンツ

苦手意識を減少させる５つの要素を踏まえて、実際の講義を通して実証研究することで、その苦手意識が減少した理由の考察から、小学校教員養成課程における効果的な教育コンテンツのいくつかが徐々に明らかになってきた。

１．教育コンテンツ①　図画工作・美術のふりかえりと教育観の確認

第１の教育コンテンツとしては、まず今までに受けてきた図画工作・美術教育のふりかえりと図画工作で大切にすべきこと、いわゆる教育観の確認が重要であると考える。これは、苦手をつくらないための要素①の上手・下手の呪縛から解放させるための個々の教科イメージを確認するための必要な前段階でもある。

そのために、授業第１回目の授業開きとも言えるガイダンス時には、プリント記述による実態調査を兼ねて、学生一人一人で自分自身が受けてきた図画工作・美術教育についてふりかえってもらう。図画工作や美術における様々な経験や思い出なども含めてふりかえり、現在この教科に対してどのようなイメージがあるのか、個々の教科イメージの相違を把握することができる。この学生が抱いている教科イメージは、学生自身が受けてきた図画工作・美術教育の反映でもある。

「苦手意識を減少させるためには、今まで抱いていた『うまく上手に作品をつくらねばならない』という固定概念や価値観を変容させることが重要な要素の１つと考えた。」[9]

教科のイメージを確認することで、要素①で問題にしていた、この学生が「うまく上手に作品を描き、作らなければならない」という強い呪縛状態にあるのか、その状態にないのかを理解することができる。もし、図画工作・美術に対して否定的なイメージを持っている場合には、うまく上手に作品をつくらねばならないという学習風土の中で、まわりの人などから「下手だな」とか冷やかされたりして嫌な思い出や経験をしているケースが少

なくない。さらに、うまく上手な作品は、常に褒められ高い評価を受けている事実を目の当たりにした結果であるともいえる。授業開始段階では、まず学生自身が抱いている図工・美術のイメージに着目する必要があると考える。

今まで抱いてきた図画工作・美術のイメージが、肯定的で前向きなイメージの場合には、基本的には図工·美術が好きで、造形的な表現の楽しさや面白さについても実感をもって経験し理解していることがわかる。

逆に、それが否定的なイメージの場合には、図工や美術が嫌いで、表現そのものの楽しさを味わう前に、苦手意識が先攻していて蓄積されていることがわかる。そこでは、本来自由であるべき表現活動を精神的に不自由なものにしており、さらに小学校教員を目指す大学生にとっては、大きな悩みでもあり不安要素にもなっている。

最終的には、肯定的なイメージはさらに強化させ、もしも否定的なイメージがある場合には、それを肯定的イメージの方向に変容させる必要性がある。

2．教育コンテンツ②　図画工作・美術で目指すべき教育のねらい

第２の教育コンテンツとしては、この教科のイメージとも直結するこの教科で何を大切にし、この教科で何を学ばせるのか、教科のねらいを確認すると共に理解させることが重要であると考える。これは、苦手意識を減少させる要素①の上手・下手の呪縛から解放させ要素②に移行させることに直結するコンテンツである。

そのために、文部科学省が告示する学習指導要領に明示されている教科の目標とも関連して解説する必要がある。学習指導要領には、うまく上手な作品づくりを目指すこととは明示されていない。しかしながら、学校教育現場での実際は学習指導要領の目標と離れて児童にうまく上手な作品作りを目指させるような教育実践が横行している。そのためにも教員養成段階においてしっかりと教科理念を理解してもらう努力が必要である。

さらに学習指導要領に準拠して作成されている教科書についても紹介することも目指すべきねらいを理解してもらうためにも重要なコンテンツであると考える。

天野正輝も教科書について、次のように述べている。

「教科書は、あくまで真理·真実にもとづいた内容であること、子どもにとって楽しく、感動のわく教材が盛り込まれ、豊かな情操と確かな学力が身につくように構成されていること。」[10]

つまり、教科書を教えるのではなく、教科書で教えるためには、教科書によって何を子どもに教えていくのか、教師自身が追究していかなければならないのである。関連して、明治・大正時代の教科書『新定画帖』なども現行の教科書と比較させることで、昔が教科書をお手本とする臨画教育であったのに対して、現在では目指すべき作品例を示すと言うよりも児童一人一人の表現が重視されていることを理解させることができるので、これも有効な教育コンテンツであると考える。

実際の具体的な授業場面においては、題材を子ども達に提案する場面において図画工作では、単なる作品づくりが目的ではないことを明確に示す必要がある。作品自体もうまく上手な作品づくりではなく、苦手意識をつくらない要素②でもある自分らしい表現を目指すことが目的であることを強調する必要がある。

故に、授業の導入段階で見本作品を提示することは、教育コンテンツとしてはふさわし

くない。作品例を示すよりも一人一人の子ども達が、自分らしい表現をイメージできるような導入の在り方が求められる。

要素②のうまさよりも自分らしい表現を目指すことを反映した教育コンテンツは、題材研究の場面で発揮することができる。各題材を提案する際に、この題材を通して児童に何を求め、どのような力を育てることを目的にするのか考えさせてから、実際に取り組ませる必要がある。教育的なねらいを明らかにしてから題材研究に取り組ませることである。

3．教育コンテンツ③　表現の楽しさを味わわせる表現活動

教育コンテンツ③では、表現活動そのものから得られる楽しさ・面白さを味わわせるような体験を題材研究として教育内容に位置づけることが重要である。

これは、苦手を減少させるための要素④であり、苦手意識が減少した理由の中で、「表現が楽しかったから」「面白かったから」という記述が多かった。

図３：身辺材を使った題材研究

今まで、苦手意識が精神的な足かせになって、なかなか表現の楽しさを味わうことができなかった者たちにとっては、表現の根源的な魅力を体験できることは、楽しさや面白さの実感と共に大きな意識改革を促すことに繋がることができたといえる。これは、重要な教育コンテンツの一つである。

教員養成課程の講義で扱ったのは、低学年向きの題材研究として、身辺材の新聞紙を使った題材名「新聞でへんしん」を教育内容として実施した。身近な材料の紙が、様々な表現の可能性を有していること、新聞紙から多様な表現が生まれることを理解することができて、素直に楽しめる有効な教育コンテンツの一つである。

中学年向き題材としては、可塑性のある粘土を使った自由な立体表現も表現の楽しさを味わうための有効な教育コンテンツであった。特に、絵に苦手意識のある者にとっては、比較的とっつきやすい題材であった。題材名「不思議な生き物」や「おもしろお化け」「住んでみたいお城」「おいしそうなケーキ」等、アイディア次第で様々なテーマを設定し題材研究として取り組むことができる。

題材研究と共に、クレヨンやパスなどを使って、用具の特性を理解すると共に、様々な表現の可能性と楽しさを理解してもらうことも教育コンテンツの１つである。

4．教育コンテンツ④　苦手意識を克服する絵画表現活動

教育コンテンツ④は、やはり図工・美術に苦手意識のある学生は、圧倒的に絵画に対するものが多く、「工作は好きだけど、絵は嫌いである」とはっきり述べる者もいて、苦手意識を減少させるためには、あえて絵画表現にこそ取り組ませる必要があると考える。

絵を描くことに苦手意識がある者に対しては、絵画表現の可能性や奥深さ、そして絵の表現の楽しさを理解してもらうことで絵画表現に対する苦手意識を少しでも解消させる必要があり、これは重要な教育コンテンツの一つである。

ここで重要なのは、要素①に関連し、絵画表現はうまく上手に描くことが重要でないことを理解してもらい、その呪縛から解放する必要性がある。どうしても物を正確にとらえて正しく写さなければならないという意識から、もっと重要な要素に気づき理解してもらう必要がある。

「物の形を正しく写すということはほとんど問題にされない。いかに画面に作者自身が、いきいきと個性的に表現されているか。ということが大切なのである。」[11]

図４：絵の具を使った絵画の表現風景

風景や人物をそのまま紙にうつすのであれば、科学技術の粋のデジタルカメラやカラープリンターで印刷すれば容易に再現することが可能な世の中において、わざわざ時間と労力をかけて、人間が絵に描き表現することの根本的な教育的意義について理解してもらう必要がある。

絵画題材の指導については、花篤實は美術教育の原点から次のように述べる。

「今一度美術教育の原点に戻って『何のために絵をかかせるのか？』という素朴な問いかけから『われわれは作品を作るために授業をしているのではない、子どもの心を豊かにするため、すばらしい感性や創造性を養うためにこそ表現活動があり、授業があるのだ』という当たり前の指導観に立つことによって、結果主義、作品主義を克服する必要がある。」[12]

絵画題材では、描いてみたいと思ったその子だけのイメージや思いが毎回確認できることが必要である。そこで、最初に思い描いたイメージやその時の思いを言葉や文章化することで目に見える形に視覚化しておくことである。これは、重要なコンテンツの１つである。これは、毎回表現を始める前に確認させると共に、最終の鑑賞場面では、表面的な作品の鑑賞ではなく、この作者の思いやイメージとセットで鑑賞させることで、より鑑賞が深く充実したものになると考えた。

図５：「本当に描きたい風景」作品

５．教育コンテンツ⑤　自分らしさを目指す表現活動体験

教育コンテンツ⑤は、造形美術教育における絵画を含めた全ての表現活動では、うまく上手な作品作りではなく、一人一人が自分らしい自分だけの表現に取り組ませることがとても大切であり、これは大学生ばかりでなく児童・生徒に苦手をつくらないための重要な教育コンテンツの一つであるといえる。

この教育コンテンツが徹底されていれば、作品として問題となる既存のキャラクター作品とか、近くの友人と類似した作品などは、出現してこないと考える。

自分らしさの重要性を理解してもらうために、実際の授業場面のビデオを利用し、特に

児童がどのような材料を使って、どのような作品を表現しているのか着目して観てもらっている。小学２年生の児童たちが、様々な身辺材料を使って音の出る楽器を制作しているが、同じような作品が一つもなく一人一人個性的で豊かな作品が出来上がっている。

実際の教育場面における児童の作品群を見ることで、自分らしい表現の魅力とその重要性を理解することができる。題材を児童・生徒に提案する際においては、この教育コンテンツは有効である。

しかしながら、実際に自分らしい表現を目指す行為は、写真や既存のあるものをそのままコピーすることよりも遥に難しい。つまり試行錯誤しながら新しい創造的な価値を生み出すことは容易ではない。授業の最初に自分の思いやイメージをどのように表現したら良いのか悩み苦しんでいる者がいたら、それを取り上げてクラス全体で考える場面をあえて作ることが重要である。これは、個々が自分らしい表現を目指すことをクラス全体でサポートする教育コンテンツの１つである。

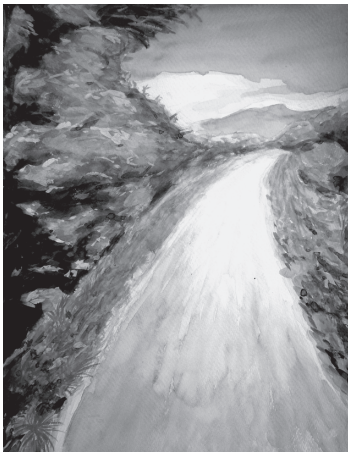
図６：思い出の風景作品

この自分らしい表現を目指させる教育コンテンツは、題材を提案する時点をスタートに、全ての学習場面において一貫して徹底させる必要がある。一人一人の表現過程場面で机間巡視しながらの助言やアドバイスにおいても、教師から一方的に教師の価値観で助言したり、アドバイスするのではなく、まず一人一人の児童・生徒の思いに寄り添う所が重要であり、そこからアドバイスや助言が行われるべきである。

また、題材の作品が完成した後の鑑賞場面では、うまさや上手さで鑑賞するのではなく、あくまでも一人一人の自分らしさの観点で鑑賞されるべきであろう。これは、作品の評価にも関わる重要事項であり、教科全体を支える教育コンテンツでもある。

６．教育コンテンツ⑥　豊かな表現を可能にする知識・技能の内容

教育コンテンツ⑥としては、自分らしい表現を可能にする用具の基本的な扱いや技法に関する知識・技能が上げられる。

その顕著なものが、水彩絵の具による絵画表現の分野である。特に、図工・美術に苦手意識を抱くものには、圧倒的に「絵をかくこと」に対して苦手意識が強い傾向があり、絵の具での失敗経験があり、思うように表現できなかった苦しい思い出がある。

図７：混色方法の動画コンテンツ

水彩絵の具の特性を活かした正しい用具の扱いや技能に関する基本的な知識や経験は、苦手意識を解消するためにも必要不可欠な教育コンテンツといえる。

水彩絵の具用パレットの扱いなどについては、教員養成課程の大学生でも過去に教えられた記憶もなく意外なほど身についていないことがわかった。例えば、絵の具は一部の使

う色しかパレットに出さず、それを他の色と混ぜてペンキのような濃さの絵の具を直接使うようなケースがあった。これでは自分らしい表現の実現は、難しい。

基本的なパレットの扱いについては、実際に例示することも必要であるが、例示の時間を短縮するために簡単な動画コンテンツ（図７）を作成して授業の中で活用した。この動画の教育コンテンツは、今年教員免許更新講習を受講されたベテラン教師たちにも紹介して評価してもらった所、是非とも欲しいという教師も得て好評であった。

パレットの扱いに関連して絵の具の実際の混色の仕方について、これも実際に例示したり、動画コンテンツで示す必要があると感じている。水彩絵の具の表現の可能性は、この混色の仕方によって無限に拡張させることが可能だからである。

また水彩絵の具関連では、筆のタッチも重要になる。機械的なワンパターンのタッチでは、冷たい平面的な表現で終わってしまうが、タッチを様々工夫することによって豊かな表現が可能になる。自分らしい自分だけの表現を実現するためにも筆のタッチの工夫は、重要な教育コンテンツといえる。この動画コンテンツも作成し講義で活用した。

しかしながら、ここで注意すべきは、この知識・技能の伝授が教育における目標ではないということである。あくまでも児童・生徒自身が自分らしい表現を目指すため、それを実現することをサポートするための知識・技能であるべきであり特に留意したい。

７．教育コンテンツ⑦　お互いに表現を認め合える鑑賞活動の位置づけ

教育コンテンツ⑦としては、とかく図画工作・美術では、個々の表現活動が中心に思われがちであるが、鑑賞活動も表現活動と同等に重要な学習活動である。この充実した鑑賞活動を学習にしっかりと位置づけることは、重要なコンテンツであると考える。

学習指導要領には、鑑賞活動を重視するように明示されてはいるが、週の授業時間数の少なさと相まって、あまりその教育効果が実現され実感されていない。

今回の実証研究で、苦手意識が減った理由として、鑑賞場面で「友だちの作品のうまさではなくその人の表現の良さを発見できたことから」とか、「他の友だちから自分の作品の良い所を褒めてもらったから」と理由を書いている者が少なくなかった。あらためて苦手意識を減少させるためには、充実した鑑賞がとても有効であることを確認できた。

図８：お互いを認め評価し合う鑑賞活動

この鑑賞活動においては、苦手をつくらない要素①から⑤までが十分発揮されていないと、その教育的な効果は期待できない。従来のうまく上手な作品づくりが、図画工作・美術の価値観のままでは、鑑賞活動も上手く上手な作品を探し比較するような鑑賞活動で終始してしまう。そこでは、一部の児童・生徒だけが認められ褒められて満足するものになり、逆に、他の子ども達にとっては、苦手意識をさらに増幅させ、図工・美術の教科そのものを嫌いにさせる可能性がある。

「『環境が人をつくる』を再確認したのと同等レベルで『人が環境をつくる』という筋道も確認し、教育環境の整備は教師の不可避の課題であり、よい造形環境が整備された

とき、はじめてよい美術教育が具現化されることを指摘しておきたい。」[13]

要素⑤の学習空間のように、一人一人の表現を認め合えるような温かいクラスの雰囲気や学習環境があってこそ、苦手意識をつくらない有意義な鑑賞活動ができると考える。

「学習空間とは、児童・生徒や教師によって意図的・無意識的に形成されている教育規範・価値観をさしており、評価を含めた造形美術教育のあり様を大きく左右し、その結果、大きな教育格差を生みだすことになっていると考えている。」[14]

Ⅵ. 本研究における成果と今後の課題

今回の研究の成果は、３年間の研究期間において、図画工作・美術への苦手意識の実態を把握すると共にその原因を追求してきた。その考察から、苦手意識のある児童・生徒と苦手意識のない児童・生徒の理由には、根本的な質的な相違が存在していた。

それは、苦手意識のある児童・生徒には、うまく上手に作品をつくらねばならないという意識が強いのに対して、苦手意識のない児童・生徒は、うまく上手にできるという技術面よりも表現の楽しさや面白さがその理由になっていた。

本研究における苦手意識の問題は、単に表現能力や技術の有無や得意・不得意という個人レベルの問題ではなく、教育の目標やあり方に関わる重要な視点であると考える。

小学校教員を目指す学生たちには、将来教壇に立った時に目の前の児童の全てに造形表現の楽しさを味わせ、一人一人の子ども達の豊かな表現が生み出されるような本当の図画工作教育を実現できるような教師になって欲しいと願っている。

そのためには、学生自身が抱いてきた図画工作のイメージや価値観をより良い方向に変革し、図工・美術に対する苦手意識をつくらない教育を目指してもらうことが重要であると考えた。そして、その小学校教員養成課程における教育内容はどうあるべきか。そのための有効な教育コンテンツとしてはどのようなものがあるのかを追究してきた。

本研究における子ども達に苦手意識をつくらない教育内容・教育コンテンツとは、見栄えの良い形だけの作品の完成を目的にしたものではなく、充実した表現プロセスを児童・生徒に歩ませることによって、苦手意識を越えて本当の学びとさせることである。

そのことが、結果的には造形美術教育の本質とも言える児童・生徒一人一人の表現を重視し、試行錯誤しながら自分らしい自分だけの表現に取り組ませることで得られる教育的効果、いわば図画工作科教育における学びを実現しようとすることであった。

今後の課題としては、今回の小学校教員養成課程の講義における教育内容をもとに、実際の学校教育現場で活用できる教育内容・教育コンテンツを明らかにすることである。

本研究の結論は、図画工作・美術への苦手意識をつくらない教育とは、結果的には目指すべき造形美術教育の実現そのものなのである。

なお本研究は、平成26年～平成28年度科学研究費補助金 基盤研究（C）「子ども達に苦手意識を抱かせない図画工作・美術における教育コンテンツの研究・開発」（研究課題番号26381173）の研究成果の一部である。

註、引用文献一覧

1　降籏　孝、「学校現場における図画工作教育の課題－教員免許状更新講習の実施・考察から－」、美術科教育学会誌『美術教育学』第32号、2011、pp. 399-400
2　降籏　孝、「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素－目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて－」、大学美術教育学会誌『美術教育学研究』第48号、2016、p. 376
3　大学と附属学校との共同研究をきっかけにして、平成26年度に山形大学附属小学校と附属中学校、一般公立中学校、2つの県立高等学校を対象に、小学生から大学生までの大規模な実態調査を行うことができた。この調査の詳細とその結果については学会等にて報告済み、以下の山形大学紀要（教育科学）第16巻第2号にて詳細に論述。
4　降籏　孝、「図画工作・美術への〔意欲〕〔苦手意識〕の実態と考察－児童・生徒・大学生の実態調査結果から－」、山形大学紀要（教育科学）、第16巻第2号、2015、p. 53
5　降籏　孝、「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素」、大学美術教育学会誌「美術教育学研究」第48号、2016
6　降籏　孝、前掲書、大学美術教育学会誌「美術教育学研究」第48号、2016、p. 375
7　降籏　孝、前掲書、山形大学紀要、第16巻第3号、2016、
8　河村浩章、「美術教育における指導とは何か」、美育文化協会編　『美術教育のすべて』造形社、1971 、p. 115
9　降籏　孝、「図画工作・美術への〔苦手意識〕解消の試みと成果－目指すべき造形美術教育を実現するために－」、山形大学紀要（教育科学）、2016、p. 26
10　天野正輝、「現代教育実践の探求」、晃洋書房、1998、pp. 60-61
11　熊本高工、「教師のための図画工作」、河出書房、1950、p. 59
12　花篤　實、「子どもの現状と美術教育の理念」、「美術教育の理念と創造」、黎明書房、1994、p. 33
13　若元澄男、「造形環境」、『図画工作・美術科　重要用語300の基礎知識』、明治図書、　2011　2011、p. 200
14　降籏　孝、「図画工作科・美術科における教育コンテンツの研究Ⅰ－造形美術教育をより良くするための第3の視点－」、大学美術教育学会誌『美術教育学研究』第47号、2015、　p. 324

Summary

Furihata Takashi

A Study of The Educational Contents to Eliminate The weak awareness of Art
― Educational Contents for Elementary School Teacher Corse ―

The purpose of this study was to explore the elimination of the weak awareness education of art , it is to clarify the educational content in primary school teacher training course. In 2013 I conducted a survey about the arts and crafts education and art education, has been analyzing the results. It revealed the elements of the order to eliminate the children of the weak awareness from there. The element has been validation studies incorporated into lectures. To investigate consider the transformation of the weak awareness of college students, I was able to clarify some of the valid educational content.